

今井祐子 著

陶芸のジャポニスム

11・30刊 A5判760頁 本体7800円  
名古屋大学出版会



# 窯変する美意識： 肌ざわりの感性学にむけて

陶器・炆器の文化変容と釉薬の啓示

稲賀繁美

十九世紀後半の欧米を席捲した日本美術趣味は、陶藝の分野でも特異な発現をみだ。というよりもさらに正確に言うなら、陶藝に代表される工芸の分野がその焦点であった。にもかかわらず、その全貌を掴むことは、今まで必ずしも容易ではなかった。そこには幾つもの阻害要因が複合している。まず日本の陶磁研究や焼き物鑑賞がジャポニスム現象に生理的拒絶を呈してきた。とりわけ古陶磁でない明治時代の輸出用品は、美術品としても低く評価されがちだった。次に欧米側にあっても工芸は美術史研究の傍流扱いされる状況が長らく支配的だった。さらに十九世紀後半に欧米で形成された第一次の日本美術収集の多くが、収集家の死去などに伴って世紀末には四散したため、復元には困難が伴ってきた。

本書はそうした多岐にわたる困難を物ともせず、二十年を超す地道で手抜きのない研練の末、著者が到達した眺望を一冊の書籍のうちに見事に綜合している。その特徴を要約するならば、まず、従来一部の専門家しか知られていなかった蛸川式風の『観古図説 陶器之部』に注目したこと。『観古図説』にはフランス語解説の存在が知られるが、著者はそこに平山成信と「治部助」ことテュ・ブスケの関与があった蓋然性の高いことを立証し、同書の輸出に携わった横浜のアーレンス商会とパリの美術商S・ピンクとの関係を洗い出す。次に一八七八年のパリ万国博覧会に注目し、これを起点としてピンクや林忠正といった美術商が販路を拡大する様子を生々しく描き、一八八〇年代には、輸出用陶磁器を越えて、茶道具の陶器や炆器へと日本陶磁認識が広が

り、「焼き物」の価値評価も大変貌を遂げる。第三に産業美術の技術革新の真相にも目を配りつつ、フランスと北米を中心とする窯業の展開を、日本趣味との関わりにおいて鳥瞰する。第四に、従来腹歴不明だった関係者を多数発掘し、詳細な編年と系譜とを復元し、点にする個別の事例を線で繋ぎ、脈絡を与えた。すべてにわたって、妥協なき調査に基づき、新資料発掘に依拠した綿密な議論が進む。一八七八年のパリ万国博覧会では、細密な絵付けを施した薩摩焼や香蘭社、瓢池会の輸出用磁器が大絶賛された。だがそこでは六十年のフィラデルフィア博覧会に続いて、時代物の茶碗や茶入も、トロカデロの特設会場で展示された。瀬戸や信楽、備前など地味な色調に乏しい形態の「茶陶」を初めて眼にして、日本愛好者たちは戸惑った。これら珍奇な品々の歴史的背景や生産地につき詳細な情報を提供したのが『観古図説』だった。ピンクはルイ・ゴンスの著書『日本美術』（一八八三年）の陶磁の章の執筆を依頼された際に、明らかに蛸川の「図説」を活用しているが、同時に『図説』に石版面に手彩色で図版掲載された多くの作例の現物そのものも入手していた。

東京で日本の陶器に開眼し「二ナカワ・タイプ」の入手に執念を燃やしたのが、お雇い外国人のエドワード・モース。一八八九年の最後のパリ訪問の際に、モースはピンクから蛸川旧蔵作品を根こそぎ購入したのでは、と評者はかつて憶測した。だがこの読みがやや勇み足気味だったことも本書は教えてくれる。欧州での日本陶磁の需要は、輸出用の豪華な赤絵金彩に目を奪われる顧客と、古物の茶陶や国内向けの実用品に注目する趣味人へと分岐する。著者はそこにリヴァーのボウス（前者）とモース（後者）の価値観の対比を止場する一方、「加賀」（前者）と「九谷」（後者）の区別に関する学説論争の背後に、同じ対立が密かに潜んでいた様子を立証する。日本の産地では欧米市場での需要を見越した生産販売戦略が模索されていた。エルネスト・シャブレが、林忠正の没後売り立てに寄与した文章で、画家のラファエル・コランは陶磁を愛する「細心で優雅な手つき」を懐かしんでいる。日本陶磁の感化はまた「肌ざわり」の美学への誘いでもあった。本書は最良の著者を得て、その実相に迫る、時宜を得た大業である。

の周辺では、工芸と美術との融合が顕著となる。一八八九年にはシャブレの工房で、ゴーギャンが自画像の頭部を象った花瓶を作る。斬られた首から流れる血を模した釉薬の滴りに、批評家のフエネオンは「高取焼」を想起している。また着色した泥漿により絵付けをするバルボティーヌ技法は、後に「印象派陶磁」（ロラン・ダルトリス）とも命名された。世紀末の批評家ロジェ・マルクスは「窯変するPinonの君主」シャブレを擁護し、彼の炆器の釉薬の「ざらざらの厚塗りにキネの睡眠」の筆致に共通する触覚的效果を指摘した。さらにロクサーンバルザックの頭部を炆器で制作する。だがバジヤマ姿の文豪の彫塑像それ自体、ゴンスの『日本美術』にも図版の見える、日本の炆器製人形彫像から受けた感化では、と評者は想定している。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）